

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720076

研究課題名（和文） 近世の敵討ち実録の享受・伝来と、当時の敵討ち観に関する研究

研究課題名（英文） Research on enjoyment and transmission of the early modern revenge nonfiction, and the views on revenge during the Edo period.

研究代表者

菊池 庸介（KIKUCHI YOSUKE）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30515838

研究成果の概要（和文）：敵討ちを題材にした実録（実録体小説）に注目し、三年間の活動を通じて、これまでに紹介されていない実録の発掘につとめ、それらを調査し、敵討ち実録の解題作成のためのデータ収集を第一の作業として行った。そのうえで、収集した実録の内容の吟味を行い、敵討ち実録のストーリー構築の方法を考察した。また、他ジャンル文芸との影響関係の有無を考え、演劇や黄表紙などの素材となっているケースをあらたに指摘した。

研究成果の概要（英文）：I investigated nonfiction (historic novel) about revenge and I collected data over the course of three years looking at the historical record in previously unexamined nonfiction literature. Using this data, I examined the record for evidence using the construction of the story, I additionally considered the presence or absence of influence from other literary genres and indicates the crossover between new forms of literature such as drama and yellow covers story book.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000円	330,000円	1,430,000円
2010年度	700,000円	210,000円	910,000円
2011年度	600,000円	180,000円	780,000円
年度			
年度			
総計	2,400,000円	720,000円	3,120,000円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：実録・敵討ち・近世文学

1. 研究開始当初の背景

江戸時代に起こった敵討ちは、当時のさまざまな媒体（文書のほか、冊子、一枚刷りなど）に記録され、文芸においても数多のジャンルに取り入れられており、近世の実録（実録体小説）でも敵討ちを題材としたもの（敵

討ち実録）が相当の割合を占めていることは、『改訂版日本小説書目年表』（ゆまに書房・昭和52年）などからわかっていた。だが、実録研究がまだ発展途上の分野であることから、研究開始当初、敵討ち物実録は、赤穂義士伝のようなごく一部の著名なものしか

知られていなかった。

敵討ち実録を含む実録研究は、昭和 40 年～50 年代に中村幸彦氏が重要性を説いたことに始まる研究史の浅い分野であり、研究開始当初は、山本卓、高橋圭一、小二田誠二、研究代表者（菊池）らによって、主要な実録の本文系統の整理や、内容の増補・転化といった本文成長の様子を具体的に解明するなど、基礎的な研究が主として行われていた。平成 14 年には、実録における初の研究書といえる高橋氏『実録研究一筋を通す文学』（清文堂）が、平成 20 年には研究代表者による『近世実録の研究—成長と展開—』（汲古書院）がそれぞれ刊行され、実録研究は少しずつではあるが、認知度を高めていった。

その間にも各図書館における蔵書目録の整備や国文学研究資料館によるマイクロフィルム収集などが進むことによって、実録研究を行っていく環境も徐々に整備されてきた。それにより、これまで存在の知られていなかった、実録と思しき書名が、多数出現してきた。とりわけ、敵討ち実録において、内容不明な実録が目立ち、これらの実態解明の必要性を痛感させられていた。

また、実録そのものの基礎的研究が行われる中で、少しずつ行われるようになってきたのが、実録と他ジャンル文芸との影響関係を検証する研究であった。研究代表者も、京都の絵師速水春暁斎が「絵本読本」と呼ばれるジャンルの素材として、敵討ち実録を用いていることを突き止めるなど、ここでもやはり敵討ち実録の実態を解明していくことの重要性を認識していた。

そのいっぽうで、多数の敵討ち実録が書かれ、読まれていく中に、あきらかに創作と認められるものも少なからずあることから、敵討ち実録の文化的側面にも興味を感じるようになった。完全な創作でなく実際の事件に基づくものについても脚色が施されており、それらを分析することから、敵討ち実録の方法や当時の人々の理想とする敵討ちのあり方を把握することが可能であると考えようになった。

以上が研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大きく分けて三つ挙げることが出来る。

(1) 未だ内実が明らかにされていない敵討ち実録を調査・収集し、目録化やデータベース化を見越しつつ、実録研究者のみならず他ジャンル文芸の研究者にも実録の書名や内容を紹介していく。

実録は、「いったいどれくらい存在しているのか」ということと、「どのような事件を題材にした実録があり、それらはどのような

書名を持つのか」ということの情報が極端に得られにくいため、研究を進めるにあたり、大きな障害となっている。後者についてはとくに厄介な問題である。題材とする事件と書名の関連が見出しにくい実録も相当存在するため、所蔵機関での検索もままならず、この問題が他ジャンル文芸に比して実録研究が遅れている大きな原因となっている。同時にこれは、他ジャンル文芸研究者が実録を調査するときの障壁ともなっていた。研究代表者は本研究応募の時点で、1 で取り上げた著書の中に主要な実録の書名一覧を掲載し、約 1600 種類の実録書名を紹介し、実録研究者だけでなく他の近世文学研究者からも好評を得たが、本研究で扱う敵討ち実録は、多くがこの一覧から洩れるものであった。いっぽう、全国の所蔵機関には、現在そこにしか伝わらない希少な、そして書名からは内容の予想できない敵討ち実録が多数存在する。それらが他ジャンル文芸の素材であったり、ある敵討ちを伝える唯一の資料となったりする場合もあり、見逃すことはできない。(1) は、このような現状を少しでも改善すべく、前著の一覧の成果を踏まえ、さらに発展させるのが目的である。

(2) 同時代他ジャンル文芸の典拠として、敵討ち実録が広く利用されていることを検証する。

1 で述べたように、実録と他ジャンル文芸との交流についての研究も徐々に行われている。実録以外でも近世文学には敵討ちを題材とした作品が相当数存在するが、その中には実録を典拠とするものも少なからず存在することが見込まれる。横山邦治氏『読本の研究』（風間書房・昭和 48 年）や棚橋正博氏『黄表紙総覧』（青裳堂・昭和 61 年）、飯塚友一郎氏『歌舞伎細見』（第一書房・昭和 2 年）などで敵討ちを題材にした作品の記事を参照すると、実録にもとづいている、あるいは影響関係にあると予想できるものがしばしばみられ、これは従来指摘されていなかった例がほとんどである。他ジャンル文芸の素材となる実録の探索は、ある程度実録に通じていないと困難な作業であり、それこそ実録研究者によって解明していかなければならない研究といえる。

すなわち、本研究はそのような他ジャンル文芸作品が実録を素材としていることを、具体的に実録を指摘することを通して明らかにし、文学史に修正を迫ることも目的である。

(3) 敵討ち実録の内容を吟味し、当時の人々にとっての理想的な敵討ちのあり方を明らかにする。

実録は幕府を憚る内容を持つために、基本的には出版できず、写本で転写されることに

よって流布していたわけだが、転写の過程で本文に脚色加わる。多くは講釈師によるものと考えられているが、講釈師は享受者である民衆が納得できるような事件の認識や、「こうあるべき」という願望を反映させる。敵討ち物の実録に即していえば、当時の民衆の理想とするような敵討ちのあり方、それに応えるような敵討ち実録の脚色の施し方、あるいは忠孝、善悪の姿が投影されることが予想される。本研究の三つ目の目的は、これら、敵討ち実録を通じて、当時の民衆層を中心とする人々の、「敵討ち観」とでもいうものを把握することである。

以上(1)～(3)の目的を達成させることを通じて、近世文学・近世文化に実録が強い関わりをもっていることを証明することが、最終的な到達目標である。

3. 研究の方法

本研究は、全国に散在する実録のうち、とくに敵討ちを題材にした、これまでに紹介されていない実録の調査・収集を行い、内容の吟味や、原史料及び他ジャンル文芸等との比較検討を通じて、2に記した目的に達するものである。以下、2で挙げた(1)～(3)にしたがって方法を説明する。

(1) 調査収集。本研究における、もっとも基礎的な作業であり本研究の中心である。

①、これまで研究代表者が行ってきた活動により、敵討ち物の実録を多数所蔵していることが判明している所蔵先のをリストアップする。

②、所蔵先に赴き、原本の書誌と内容を調査、可能であればデジタル撮影を行う。国文学研究資料館によってマイクロフィルム化されているものについては、マイクロフィルムから複写し、データを収集する。

マイクロフィルムについては、すでに予定していた所蔵先のもの以外についても同様の作業を行う。他にも研究期間内に、敵討ち実録を多数所蔵している所蔵先があらたに判明した場合は、適宜調査先に盛り込む。

③、収集した調査データをパソコン入力し、解題作成へ向けた準備をする。

(2) 敵討ち実録と他ジャンル文芸との比較。

①、調査・収集したデータのうち、書名、登場人物名、内容の展開・特色等に注意しつつ、すでに発表されている他ジャンル文芸の解題類と照らし合わせ、両者の影響関係が予想されるものをピックアップする。

②、他ジャンル文芸のテキストを収集する。実録が原本確認を基本とするのに対し、翻刻のあるものについては、積極的にそれを用い、原本確認は必要に応じて行うこととする。

③、両者の内容を吟味する。他ジャンル文芸と実録との対応部分や差異を抽出していく。実在の事件にもとづいていることが判明しているものについては、実説を確認し、事件から文芸への流れを把握する。この作業過程において、書誌的要素、内容的要素の両面から、実録と他ジャンル文芸との先後関係も判断する。

(3) 敵討ち実録同士の比較・吟味。

(1)や(2)で、すでに把握している実録の内容同士を比較し、共通する特徴を抽出する。とくに、主人公をはじめとする登場人物の、行動や心情描写、作者による人物の描き分け、筋立ての趣向などの「型」に注目し、敵討ちを題材とした実録の、具体的な特徴を考究する。

4. 研究成果

3と同様、2で掲げた(1)～(3)に分けて説明する。

(1) 調査点数は115点(同じ内容のものも含む)に上り、予想以上に多くの敵討ち実録を調査することができた。大半は研究一年目に収集している。研究期間中に、敵討ち実録を多数保有している個人所蔵者が判明したため、当初の計画を修正し、そちらを優先的に調査した。

披見した敵討ち実録は、大半がこれまでに知られていないものであり、可能なものについてはデジタル撮影をして、サンプルの充実をはかった。

調査した敵討ち実録については、今後の解題集作成・データベース化を見越して、書誌的事項のほか、「敵討ち事件のもととなった事件の起きた年月」、「敵討ちの行われた年月」、「登場人物とその役割」、「物語中にみられる趣向」等をデータとしてパソコン入力した。

敵討ち実録の解題は物語の梗概が必要だが、1点1点の分量が多いことと、所蔵先によっては現地での閲覧のみによる調査しか認めていないところもあることから、数量的・内容的にまだ公開するに足るだけのレベルに達していないが、いくつかについては、小規模の研究会等で紹介した。

(2) 調査した敵討ち実録のうち、「お春の敵討ち」と呼ばれる事件を扱った実録に注目し、この実録の人物名や筋立てを検討することで、黄表紙『鎌倉街道女敵討』、浄瑠璃「敵討操姿鏡」の素材となっていることを明らかにした。「お春の敵討ち」の実録については、原文を翻刻した。また、これは発表の準備中だが、「七北田の敵討ち」と呼ばれる事件の実録が歌舞伎の典拠となっていることも発

見している。

(3)「お春の敵討ち」を題材とした実録の諸本を調査し、内容を吟味し、この実録が「尼崎幸右衛門娘りよの敵討ち」、「傾城瀬川の敵討ち」と共通する部分があることを見出した。このことから「お春の敵討ち」が架空の敵討ちと認められるとの結論を導き出すとともに、架空の事件を「実録」として読み手に納得させるための要素を明らかにした。

他に、敵討ち実録に多く見る事の出来る「武者修行」の趣向に注目、(1)によって収集したデータを分析し、事件の舞台となる時代が十七世紀半ばより後になると、武者修行の趣向があまりみられなくなっていくことを指摘した。

また、(1)の解題執筆の過程において、敵討ち物実録の内容的なあり方について考え、研究会において見通しを提示した。合わせて、敵討ち物以外の実録の内容分析の必要も感じ、「大岡政談 鯨論」、「久留米騒動」などの実録の内容を吟味し、それぞれの実録の執筆意図を解明した。さらに、これらとの比較を通じて、敵討ち物実録の内容的特徴の検討を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 菊池庸介、「久留米騒動物」実録の基礎的研究—『筑後国郡乱実記』系統を中心に—、雅俗、査読有、第十一号、2012、印刷中、
- ② 菊池庸介、「お春の敵討ち」実録の広がり、福岡教育大学国語科研究論集、査読無、第52号、2011、57-71、
- ③ 菊池庸介、「お春の敵討ち」実録の生成—写本の備える真実らしさ、日本文学、査読有、第59巻10号、2010、25-35、
- ④ 菊池庸介、実録と十七世紀、査読有、文学、2010、145-157、

[図書] (計2件)

- ① 鈴木健一、三弥井書店、鳥獣虫魚の文学史 魚の巻、2012、印刷中、
- ② 雲英末雄、笠間書院、江戸書物の世界 雲英文庫を中心にたどる、2010、771-789、

6. 研究組織

(1)研究代表者

菊池 庸介 (KIKUCHI YOSUKE)

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：30515838